杏林医会誌　44 巻 1 号　2013 年 4 月

巻 頭 言

杏林大学医学部解剖学　　松　村　　譲　兒

紙媒体の形で出版されてきた多くの医学雑誌が電子ジャーナル化され，われらが杏林医学会雑誌も永年に亘る「雑誌」が「CD」に変貌を遂げました。掲載までの time delay がなくなり，投稿，校正，印刷，出版の流れや経費も従来とは比較にならない程に合理化されたことは申し上げるまでもありません。さらに昨今は電子化に加え，Publish-Ahead of Print が研究発表のスピードを年単位・月単位から時間単位にまで短縮し，CD さえも早晩取り残されてしまいそうな印象です。

変化し続ける医学ジャーナルにあって「雑誌」の役割はどう変わるのでしょうか。それは研究者の姿勢にも左右されるものと思われます。研究発表の迅速化は重要であり，発表と同時に世界中に配信されるグローバル化は社会の要求に沿った「世の流れ」ですが，ともすれば研究の先陣争いや功名心に流され，研究自体が拙速となる危険性を孕んでいることは銘記しておかなければなりません。下手をすれば，信頼できない情報が蔓延する恐れがあるからです。

嘗て，原稿用紙に誤字を気にしながら手書きし，一頁ごとミスタイプのないように慎重にタイプライターを打った時代は遠い昔の話です。暗室で投稿用の写真を焼きつけ，台紙に糊付けする作業もこの 20 年来姿を見ません。コンピュータの普及は，論文作成から多くのストレスを取り去ったように感じます。しかしながら，モニター上での論文は「読む」と言うより「眺める」という印象で，伝わってくるものが希薄になったような気がします。また，コンピュータでいくらでも修正できるデジタル写真には，先人達が暗室の中で汗をかきながら作成した姿が映っておらず，信憑性に疑問を感じることさえあります。

電子ジャーナルが当たり前になった現在でも，学術研究の本質が変わったわけではありません。これまで杏林医学会を支えてこられた諸先輩に倣い，先入観や推測に惑わされることなく，事実を謙虚に受け止め，真摯な姿勢で考察することが，その形がかわりこそすれ「雑誌」が本来の役割を全うするための必要条件ではないでしょうか。杏林医学会会員の皆様が雑誌の形態に囚われることなく活躍され，杏林医学会雑誌の発展に寄与して頂けることを切に願っております。